

覚鑊の教学に見る行位論

— 除蓋障三昧についての理解を中心に —

大 鹿 眞 央

一 問題の所在

真言宗新義派において「興教大師」の諡号で呼ばれ、中興の祖と目されている覚鑊はその著作『五輪九字明秘密』において以下のように述べている。

三藏云、余依_レ金剛智三藏_二伝_三此五字_一、起_レ信修_レ之及_三千日_一、於_二秋夜_一滿月、忽然而得_三除蓋障三昧_一、云云。
因_レ茲、弟子得_レ聞_三此秘訣_一、深信多年修_レ之既得_三初位三昧_一。有_レ信禪徒勿_レ生_三疑惑_一。若_レ虚言、修_レ之知_レ自。
唯願、勿_レ令_三一生空過_一。

ここにはある僧侶の言として、金剛智三藏より五字真言⁽²⁾を伝授されて千日に及ぶ修行の後に除蓋障三昧を得た

という記述が挙げられている。そして、覺鑿自身もこの秘訣を聞き、多年に修行した結果、初位の三昧を得る。こ
とができた旨を告白している。残念ながら、この「三蔵云」が誰であるのか特定することは困難であると言わざ
るを得ない。しかし、覺鑿がこの言を承けて初位の三昧を得たと明言している点、また除蓋障三昧を初位の三昧
と換言している点は注目に値する。この記述は後代になって覺鑿を「覺鑿聖人」と呼ぶようになった遠因のひと
つにもなるのであるが、⁽³⁾果たして覺鑿はどのような認識を持って除蓋障三昧及び初位の三昧を得たと宣言してい
るのであるうか。小稿では覺鑿における除蓋障三昧及び初位の理解について考察していく。

二 除蓋障三昧について

そもそも除蓋障三昧とは『大毘盧遮那成仏神變加持經』（以下、『大日經』）入真言門住心品（以下、住心品）
に出てくる除一切蓋障三昧のことであり、そこでは以下の如く記述されている。なお、これより小稿ではこの三
昧を便宜的に「除蓋障三昧」という名称で呼ぶことにする。

秘密主、此菩薩淨菩提心門、名_レ初法明道。菩薩住_レ此修学、不_レ久勤苦、便得_レ除一切蓋障三昧。若得_レ此者
則与_二諸仏・菩薩_一同等住。（中略）復次秘密主、住_二此除一切蓋障_一菩薩、信解力故、不_レ久勤修、滿_二足一切
仏法_一。⁽⁴⁾

右の文章では菩薩の修行に三重の段階が設定されているように読むことができる。まず菩薩の淨菩提心門、即
ち初法明道から始まり、それに住して修学する菩薩は久しからずして除蓋障三昧を得て、諸仏・菩薩と同等の境

地に住することになる。そして、除蓋障三昧を得た菩薩は、また勤修すること久しからずして一切仏法を満足するのである。

ここには「不久」という表現によって次の段階へと移行していく様子が見て取れるが、「初法明道」と「得除一切蓋障三昧」、そして「満足一切仏法」といった三重の段階と行位との配当が明確にされていないため、これが後代の学匠たちにとって究明すべき課題となるのである。右の文章に関して、『大毘盧遮那成仏経疏』（以下、『大疏』）巻一では以下のように説明している。

経云、秘密主此菩薩淨菩提心門名初法明道菩薩住此修学不久勤苦便得除一切蓋障三昧者、入三仏智慧、有三無量方便門。今此宗、直以三淨菩提心_二為_レ門。若入三此門、即是初入三一切如来境界。(中略)

法明者、以_レ覺三心本不生際、其心淨住生三_レ大慧光明、普照三無量法性、見三諸仏所行之道。故云三法明道_二也。菩薩住三此道_二時、從三妄想因縁_一所有煩惱業苦皆悉清淨除滅。(中略)

因三淨菩提心_二照明諸法_一故、少用_二功力_一、便得_二除蓋障三昧_一。見三_二八万四千煩惱実相_一、成_二八万四千宝聚門_一。(中略)

故云_二若得三此三昧_一者、即与_二諸仏・菩薩_一同等住。当_レ知、行人則是位同三_二大覺_一也。以_二其自覺_レ心故_一、便得_二仏名_一。然非_二究竟妙覺大牟尼位_一。

ここでは『大日経』の文章について、直ちに淨菩提心門に入る者、つまり初法明道を得る者は「初めて一切如来の境界に入る」と説明している。そして、法明道の説明をした後に、除蓋障三昧を得た者は大覺と同位となっ

て仏名を得ると説いている。就中、最も注目すべきは「然非究竟妙覺大牟尼位」の文である。これに依れば、除蓋障三昧を得た菩薩は仏名を得るといへども、それは究竟妙覺大牟尼位、即ち究竟の妙覺位に上ったわけではなく、いと理解されるのである。

以上のように、『大疏』の解説を読むと、除蓋障三昧と行位との配当が曖昧であるように推測されるのであるが、除蓋障三昧に関して考察を深める上で『無畏三藏禪要』を看過するわけにはいかない。『無畏三藏禪要』は空海著『御請來目錄』⁽⁶⁾の「論疏章等」の段にも書名が挙げられているが如く、空海・円仁・宗叡といった平安前期の密教僧たちによって日本へ請來され、密教の行位を考える上で非常に重視されてきた。特に台密の安然是『胎藏金剛菩提心義略問答抄』(以下、『菩提心義抄』)で『無畏三藏禪要』を引用しながら除蓋障三昧を詳しく説明していることから、本書を重んじていた様子が窺われる。⁽⁷⁾以下に『無畏三藏禪要』の文を挙げて、その論旨を確認する。

初觀之時如_レ似_二於月_一、遍周之後無_レ復方圓。作_二是觀_一已、即便証_二得_レ解脫一切蓋障三昧。得_二此三昧_一者、名為_二三地前三賢_一。依_レ此漸進遍_二周法界_一者、如_レ經所說一名為_二初地_一。所_二以名_二初地_一者、為_レ以下証_二此法_一、昔所_レ未_レ得而今始得、生_中大喜悅_上。是故初地名曰_二歡喜_一。⁽⁸⁾

右の文章を読むと、「解脫一切蓋障三昧を得る者は、地前の三賢と名づける」とあり、続けて「此れに依つて漸く進んで法界に遍周する者は、經の所説の如く初地と名づける」と説いている。つまり『無畏三藏禪要』の解に依れば、除蓋障三昧は初地位より低い三賢位(十住・十行・十廻向)に配されて、これを獲得した後に、さ

らに「漸く進んで」初地位に至ることになる。

ここで冒頭の『五輪九字明秘密釈』の文に立ち返ると、覚鑿は除蓋障三昧を「初位の三昧」と称していた。なお、覚鑿は『心月輪秘釈』において、菩提心を月に喩える誠証として『無畏三藏禅要』を長々と引用しているため、確実に『無畏三藏禅要』の論旨を理解していたと考えられる。ならば、この「初位の三昧」が具体的にどのような行位を指すかが問題となるわけであるが、残念ながら、覚鑿は「初位」と記すのみで具体的な行位を示していない。

以上のことを踏まえて、覚鑿の真意を探るべく、覚鑿の他の著作における除蓋障三昧に関する記述を見ていくことにする。まず『真言浄菩提心私記』の記述を以下に挙げよう。

復此浄菩提心、是真言行者入修秘要、悉地成就速疾妙薬也。総得_二世間・出世間一切悉地速疾成就_一、必依_二真言浄菩提心一体速疾力三昧_一也。真言行者、若以_二本尊三密方便_一、勇猛精進觀_レ之行_レ之、此生必獲_二除蓋障三昧_一、入_二諸仏境界_一。¹⁰⁾

右の文章では前掲『大疏』巻一の記述に基づき、真言行者は浄菩提心を拠り所とするべき旨が説かれている。そして、本尊の三密方便をもって勇猛に精進すれば、除蓋障三昧を獲得して「諸仏の境界に入る」としている。ここで「入諸仏境界」という表現が除蓋障三昧を得る段階で用いられている点に注目したい。というのも、これと非常に酷似した「入一切如来境界」という表現が、前掲『大疏』巻一の文中では初法明道を得る段階で用いられているためである。ならば、覚鑿は初法明道を得る行位と除蓋障三昧を得る行位を同一視していたのであろう。

か。残念ながら、右に挙げた『真言浄菩提心私記』の文の論旨は、浄菩提心の一体速疾力三昧及び本尊の三密方便の功德を宣揚することに重点が置かれているため、除蓋障三昧に関してこれ以上の詳しい説明はされていない。¹¹⁾次に『覚鑿聖人伝法会談義打聞集』（以下、『打聞集』）における記述を見ることにする。本書は談義の記録書であるが故に、その内容は多岐に互り、執筆時期も様々に異なる。保延五年の伝法会談義における記述（以下、保延五年『打聞集』）を以下に引用する。

^聖除蓋障三昧者、有^二種種除蓋障^一。不動之除蓋障・大日除蓋障等也。普賢・慈氏・妙吉祥・除蓋障云義、觀音・除蓋障一同之菩薩見。然一道無為觀音之普觀三昧云、除蓋障三昧得事、第八住心初法明道同云、有^二何失^一耶。法明道者、總真言家十二地並第八・第九住心名見。其中初故、名^二初法明道^一。浄菩提心亦名^二法明道^一云。此義可^レ得^レ心。(中略)立^二二十二地・十三地・十地等^一時、顯教總置^二初地^一。故初法明道云、真言之初地云也。凡声先無^二声字^一故。

或顯教皆地前云、真言地上云。凡字等真言云故。非^二真言教^一故、地前判也。¹²⁾

冒頭を読むと「聖」の義、つまり覚鑿自身の説として、除蓋障に不動明王の除蓋障や大日如來の除蓋障などがあることを述べ、続けて胎藏曼荼羅の四大菩薩と除蓋障菩薩との関係について説明している様子が見受けられる。これは『大疏』卷一六における「四菩薩者、普賢・文殊・慈氏・觀音良、是其位也。前緣起列衆中、或以^二除蓋障^一替^二觀音^一。或以^二一切惡趣^一替^二文殊^一。其義各異。課用^二一事^一亦得也。此中用^二觀音^一為^レ正也」¹³⁾の文を解説したものである。要するに、良の方角においては觀音菩薩を置くのを正とするが、一義として除蓋障菩薩と入れ

替える場合に、両菩薩は同一であるとするべき旨が説かれているのである。

さらに文を読むと、覺鑊は「一道無為が観音菩薩の普観三昧であるというならば、除蓋障三昧を得る事は第八住心の初法明道と同じであるというのに何の過失があるうか」と明言している。

そもそも観音菩薩の普観三昧とは『大日経』普通真言藏品において観自在菩薩が入ったとされる三昧であり、『義积』卷七では「普眼三昧」とも称されて「入此三昧時即能於念念中、以普眼遍観具足明了。故名普観三昧。」と説明されている。そして、この教説を用いて自説を展開したことで知られるのが空海である。『十住心論』卷八において、空海は第八住心、即ち一道無為心について以下のように述べている。

此一道無為住心有二種義。謂、浅略如前。深秘義者、下所説真言門義是也。言、一道無為住心所説法門是観自在菩薩三摩地門。(中略)是本来清淨理名一道無為。是一道亦名二乗。所謂仏乗。乗約能運載、得名。道扱能開通、立称。名雖二別、理則一也。是観自在菩薩住普観三昧、説自心真言曰……⁽¹⁶⁾

右の文章を読むと、空海は一道無為心に浅深二積を挙げ、深秘積において、観自在菩薩の普観三昧の境地を一道無為心に充當させている。さらに、空海は同じく『十住心論』卷八の冒頭において、以下の如く説く。

秘密主、此菩薩淨菩提心門。名初法明道。积曰、謂、無相・虚空相及非青非黄等言並是明法身真如一道無為之真理。仏説此、名初法明道。智度名入仏道初門。言仏道者、指金剛界宮大日曼荼羅仏。於諸頭教是究竟理智法身、望真言門、是則初門。⁽¹⁷⁾

本文には一道無為心を菩薩の淨菩提心門である初法明道に充当し、さらに真言門の初門に充てている様子が窺われる。つまり、空海は一道無為を普觀三味の境地及び初法明道、そして真言門の初門として位置づけたのである。

さて、ここで前掲保延五年『打聞集』の記述に立ち返りたい。文章の後半を読んでもみると「法明道者とは、総じては真言家の十二地並びに第八・第九住心の名である。それらの中の初めであるが故に（第八住心を）初法明道と名づけ、淨菩提心も亦法明道と名づけるというのである」と説明している様子が見られる。これらの文章が『十住心論』の記述を承けていることは贅言を要しないであろう。そして、「十二地・十三地・十地等を立てる時には、顯教を総じて初地に置く。故に初法明道といい、真言の初地という」と説明し、文末に別の解釈として、顯教は皆地前、真言は地上とする説を挙げている。

前掲保延五年『打聞集』の文で重要なのは、覺鑿が「除蓋障三昧を得る事は第八住心の初法明道と同じであるというのに何の過失があろうか」と反語の意味で問いを立てていることである。この言に依って、覺鑿が除蓋障三昧と初法明道とを同一視していたことが判明する。詳論すれば、除蓋障菩薩と觀音菩薩とを同一に見ることが可能なのであるから、それらの三昧と目される除蓋障三昧と普觀三昧も同一であると言える。そして、普觀三昧は空海によって一道無為心・初法明道・真言門の初門と同一に扱われていたのであるから、除蓋障三昧と初法明道とが同一であると言っても支障はないと覺鑿は説いているのである。

それに加えて重要なことに、覺鑿が密教の行位に複数種あることを認識しながら、「真言家の十二地」と記すが如く、密教の行位として十二地を立てている点が挙げられる。恐らく十二地とは、十地に等覺位・妙覺位の兩位を加えたものと考えられる。

以上をまとめると、覺鑿が初法明道を第八住心（一道無為住心）、真言門の初地位、そして除蓋障三昧を得る行位と同一視し、密教の行位については十二地を立てていたことが判明した。保延五年『打開集』における「法華教主、且初地化主故、以三百葉台上義、名三百會。自宗真言十二地中初地、第八住心配故」の文章も上記のような覺鑿の行位理解を裏付ける証左となる¹⁹。

しかし、初法明道を得る行位と除蓋障三昧を得る行位とを同一視し、初地位に充たせるとなると、前に挙げた諸文献との間に齟齬が生じてしまう。詳述すれば、『大日経』住心品では「初法明道」から「得除一切蓋障三昧」、そして「満足一切仏法」へ至る三重の段階が設定されていた。これに関しては「不久」の表現に対する覺鑿の理解が問われるところであるが、管見の限り、覺鑿がそれに言及した箇所は見当たらない。また『無畏三藏禪要』では除蓋障三昧が地前の三賢位に配当されていたが、覺鑿は『心月輪秘釈』で『無畏三藏禪要』の文章を引用しておきながら、行位に関しては本書をさほど重視していなかったことになる。

さらに言えば、康治元年の『即身成仏義』談義の記述には、行位と関連して「除蓋障院有_レ三重_一。或六淨除蓋、地前也。或初地除蓋。或地上除蓋。或十信除蓋等、種種除蓋」²⁰とあり、除蓋障三昧に十信位・六根清淨位・初地位・地上の除蓋障三昧といった複数種があることを説く様子まで見られるのである。ちなみに、右の文中で「除蓋障院」と記されているが、『興教大師全集』で「障下一無_レ院」と註釈が付けられていることから分かるように、これは胎藏曼荼羅における除蓋障院についての説明ではなく、除蓋障三昧についての解説であると考えられる。

以上のように、覺鑿における除蓋障三昧の理解は非常に複雑なものであるが、要するに、覺鑿は除蓋障三昧を初地位の三昧であると考えていたのである。では、覺鑿は初地位について如何に理解していたのか。これに

ついでには節を改めて考究することにした。

三 覚鑿における初地位の理解

東密の祖である空海に関して言えば、初地位について特に焦点を当てて論ずることはなく、それほど問題意識を抱いていなかったようである。強いて言えば、空海著と目されてきた『即身成仏義』の「歓喜地者、非_二顕教所_レ言初地。是則自家仏乗之初地。」の文が挙げられよう⁽²³⁾。ただし、本書の中で引用される諸文献には、初地を重視する傾向も少なからず窺われる点に留意する必要がある。ちなみに、覚鑿は『大遍照金剛御作書目録』⁽²⁵⁾に異本も含めた『即身成仏義』七本全てを列挙していることから、これらを真撰と見なしていたことが分かる。

覚鑿は保延六年の談義（以下、保延六年『打聞集』）において以下のように説いている。

初発心時便成正覺之文、有_二浅略・深秘_一二義。浅略、第九住心初住便証第三生果云也。深秘、真言初地証時、俱第十一地云。如下彼大日經疏積_二十地_一有_二中_一二積_レ云云。⁽²⁶⁾

「初発心時便成正覺」の文は東晋仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴経』（以下、六十『華嚴』）梵行品⁽²⁷⁾に出てくる一文であり、空海は『十住心論』巻九において「驚_二道於彈指_一、覺_二無為於未極_一。等空之心於_レ是始起、寂滅之果、果還為_レ因。是因是心、望_二前顯教_一、極果。於_二後秘心_一、初心。初発心時便成正覺、宜_二其然_一也。」⁽²⁸⁾として、第九住心の極果も真言門においては初心に過ぎないと解釈している。

また「第九住心初住に便証する第三生の果」とは『弁顕密二教論』巻上で「問、上言_二果分離_一縁不可説相但論_二

因分者、何故十信終心即弁^二作仏得果法^一也。答、今言^二作仏^一者、但初從^二見聞^一已去乃至第二生即成^二解行^一、解行終心因位窮滿者、於^二第三生^一即得^二彼究竟自在円融果^一矣。⁽²⁹⁾として、空海が法藏撰『華嚴一乘教義分章』(以下、『五教章』)卷^二を引用しながら華嚴の三生成仏説について説明したのを承けた記述であると考えられる。しかし、『空海所引の『五教章』の文中でも述べられているが如く、華嚴の成仏論では信滿成仏が基調にあるため成仏するのは初住位ではなく、第十信位から初住位へ上る直前であることに留意する必要がある。いずれにしろ、覺鑿の主意は「初發心時便成正覺」の文に淺深二積があり、深秘積では真言の初地位を証する時に「俱第十一地」となることを意味する、と説く点にある。

さて、ここに一つ問題がある。先ほど保延五年『打聞集』においては「真言家の十二地」または「自宗真言の十二地」として、密教の行位は十二地に設定されていた。然るに、右の保延六年『打聞集』では十一地に設定されているが如く読めるのである。

それに加えて、保延五年『打聞集』における「極無自性心、二無自性。所^レ謂因・果也。此心、因、無自性妙極也。自宗第十一地、果、無自性妙極也。⁽³¹⁾」の記述や『真言三密修行問答』における「淨菩提心初生名見道位。見道以後十地者、皆是真言修道也。第十一地名^二如來究竟一切智地^一也」⁽³²⁾といった記述には第十一地を仏果として扱っている様子も見られる。

そもそも『大日經』に説かれる行位論としては、卷一の「所謂初發心、乃至十地次第此生滿足」⁽³³⁾の文が基調となる。しかし、仏果がどこに設定されるのか経中に明確に示されているとは言えず、十地中、第十一地、第十二地、もしくは他の行位に設定されているのか特定することができない。また、これに附随する問題として、『大疏』の文中においても複数種の異なった行位論が説かれているため、より混乱の度合いが増すことになる。

こうした事情を承けて、後代の東密、特に古義派では、宥快門下が編纂したとされる高野山宝門の論義書『宗義決択集』「仏果十地（宥快）」の項で論じられているが如く、「所謂初発心、乃至十地次第此生満足。」の文に關して、仏果を十地内に摂取するのが主流となる。それに対して新義派では、聖憲編述の『大疏百條第三重』（以下、『第三重』）「仏果開合」の項において「凡地位之開合不同、有十一地・十二地・四十二地等判文、未見下以二仏果合十地」⁽³⁶⁾と「誠説」⁽³⁶⁾として、仏果を十地内に摂取する義を批判するとともに、『雜問答』の「乃至滿足第十地位。以三此一行一道」⁽³⁷⁾「於第十一地。」等の文証を挙げて、仏果を十地の外、特に第十一地に立てる考えが主流となつていく。また、初地位を重視する傾向が次第に強まつていった結果、「初地即極」⁽³⁸⁾の算題に象徴されるような、初地位に自性円満の正覚を得るといった成仏論も説かれるようになっていくのである。ちなみに、覺鑊より少々時代を遡つた東密の学匠である濟暹や、覺鑊と同時代の東密の重誉は密教の行位を五十二位で考えていて、仏果を妙覺位に充当していたことが先行研究によつて判明している。⁽³⁹⁾

このように東密の新義派では、仏果を第十一地に置くのが主流となつていくのであり、『大疏』卷三における「第十一地而後所見円極」⁽⁴⁰⁾の文や『大疏』卷十五における「夫言成就悉地者、謂住菩提心」也。此菩提心即是第十一地成就最正覚」⁽⁴¹⁾の文章等が根拠となつている。つまり、この十一地は、十地の上に「等覺位」と「妙覺位」を置いた十二地の行位論とは違い、十地の上に「仏果位」のみを置いたものであると言える。しかし、覺鑊には、顕教と密教とを峻別する際に「等覺位」の概念を用いる様子も見られるのである。例えば、保延五年『打聞集』には以下のような記述が見られる。

第八住心名「等覺」、望「自宗真言仏果」故。又真言行者、設異生羝羊心、又名「等覺」・一生捕処之菩薩。即身成

仏教故、此教菩薩、必即生可成仏。故名一一生捕処菩薩也。(中略)

前九種住心、浅略隨機之故、説時信者多。雖然、非深信。隨機可信程説故。第十心、自受法樂教、永非十地・等覺境界。但仰信可。是云深信。非可信境界、殊信故。以此義、前九心無信、独第十心説有信、云云。⁽⁴²⁾

冒頭に第八住心を等覺位に配する説を挙げる一方で、真言行者ならば、たとえ異生羝羊心の段階であっても等覺・一生捕処の菩薩と名づけると説いている。続けて、前九種住心における信心は浅略隨機の説であるが故に深信ではないと断じた後で、第十住心のみは自受法樂の教説であつて十地・等覺の境界ではないため、ただ仰信するべきであり、これこそ深信と呼ぶと喝破している。

右の文章の背景に『弁顕密二教論』卷上の「自性受用仏、自受法樂故、与自眷属各説三密門。謂之密教。此三密門者、所謂如来内証智境界也。等覺・十地不能入室。何況二乘凡夫誰得堂。」⁽⁴⁴⁾の記述や『即身成仏義』の「法仏三密、甚深微細、等覺・十地不能見聞。」⁽⁴⁵⁾及び「身秘密者、法仏三密、等覺難見、十地何窺。」⁽⁴⁶⁾といった記述が大きく関係していることは論を俟たないであろう。しかし、空海がこれらの教説の中で、十地を顕密に區別して論じているわけではない点には留意しなければならない。要するに、空海にとつて法身仏の境界は等覺位や十地の菩薩も見聞できないものであり、妙覺位こそが仏果位なのである。ここには初地位を重んじる様子も、まして「初地即極」のように考える傾向も見られないと言えよう。

さらに覚鑿における顕密対弁の様子を探るため、康治元年の談義(以下、康治元年『打聞集』)の記述を以下に挙げることにする。

等覺難見十地何窺云、有義、等覺者、自宗等覺也。等覺難見、況十地云也。十地者、顯教九種心、皆云十地一意⁽⁴⁷⁾。

この文章では前掲「等覺難見十地何窺」の文について、等覺とは自宗の等覺を指し、十地とは顯教の前九種住心すべてを指す旨を挙げてゐる。前掲保延五年『打聞集』では第八住心や真言行者の低位の者を等覺に充ててゐたが、ここでは前九種住心すべてを十地に充てることで、顯教をさらに低く見る様子が窺われる。

また康治元年『打聞集』には等覺位について新たな解釈を示した記述も見受けられる。

等覺者、真言自宗結緣灌頂已後、皆云三等覺也。況伝法灌頂乎。其故、已登三葉華台故、非菩薩。未証明故、非仏果。是云三等覺。是自案之義。欲二人処分、被示義也。此義、等覺之外、不立位。是則等覺、金剛薩埵。妙覺、大日義也。等覺者、等覺妙覺義也。⁽⁴⁸⁾

右の文章を読むと、等覺とは自宗の等覺を意味し、結緣灌頂已後の真言行者すべてを指すとしている。ただし、「これ自案の義。人に処分せんと欲するがために示さるる義なり」と断りが入っているため、この説をそのまま覺鑿の正意として受け取ることは危険である。

以上のように、覺鑿は「等覺位」という概念を様々に用いて、前九種住心に対する第十住心の優位を宣揚するのである。

また自宗内の行位に関しても、覺鑿は「等覺難見十地何窺」という文を随所に援用している。『興教大師全集』

所録の著作中において、等覚位や十地の菩薩が妙覚位の境界に及ばぬ旨を述べる箇所は、顕密を対弁する場合を除いても十箇所を優に越える。また『心月輪秘釈』には「浅観少行、現生登_三初地_二焉。深解上勤、即身証_三極位_一矣⁽⁴⁹⁾」とあり、明らかに初地位は極位より劣る行位として認識されているのである。以上のことから察するに、「初地即極」といった考えを覚鑿が明確に打ち出していたとは考えられない。しかし、これと矛盾する記述が『愛染王講式』に発見されるのである。そこには「我等不_レ經_三三大僧祇之修行_一、不_レ踏_三五十二位之階級_一、幸遇_三初地即極之教_二……⁽⁵¹⁾」とあり、まさに「初地即極」の語句が見られることは注目に値する。ちなみに、『興教大師全集』には『愛染王講式』と全く違った文面である『愛染明王講式』という別本も載録されている。しかし、そこには「秘密總持之五字、十地薩埵不_レ得_レ談」とあり、十地の菩薩を低く認識していることに留意しなくてはならない。また一九九七年に刊行された『興教大師覚鑿写本集成』第四卷には、後者の『愛染明王講式』のみが載録されている。覚鑿の全著作の中で「初地即極」の語句が見えるのは『愛染王講式』のみであり、本書の扱いには慎重を期す必要があるであろう。

それでは、覚鑿における仏果位はどこに設定されているのであろうか。それを示す鍵が『十八道沙汰』に説かれている。

行者、理具金剛薩埵、依_三大日加持力_一、加持金剛薩埵、我成。サレバ我越_三顕教果位_一、不_レ及_三真言果位_一、我成_三等覚菩薩_一、可_レ思也。然云、我等不_レ可_レ起_三慢心_一。金剛者、仏。薩埵者、菩薩。我成_三金剛薩埵_一者、成_三仏菩薩_二云也。於_レ師成_三大日思_一⁽⁵²⁾。

本文には異本『即身成仏義』六本中の四本において説かれる理具・加持・顕得の三種即身成仏説(53)を援用している様子が見受けられる。真言行者は本来、理具の金剛薩埵であるが、大日如来の加持力によって加持の金剛薩埵となる。つまり、その状態は顕教の果位を越えるものであるが、真言の果位には及ばないために、等覚位の菩薩であると説くのである。⁽⁵⁴⁾そして、金剛は仏の意味、薩埵は菩薩の意味であり、金剛薩埵になるとは「仏でもあり、菩薩でもある状態」になることであると述べている。

右の文の示す如く等覚位が真言の果位に及ばないということならば、真言の果位には妙覚位が充てられるのである。この疑問に答えるべく康治元年『打聞集』を以下に引用する。

九種住心分但云妄執、非根本無明。疏從根本無明生五根本煩惱。此煩惱重重數云妄執。故根本無明、自宗仏地大日心王位障無明也。⁽⁵⁵⁾

ここでは前九種住心の所断の惑が妄執であつて根本無明ではないことを明言し、根本無明は真言宗の仏地（大日心王位）の障たる無明であると説いている。さらに大日心王位を理解するために、保延五年『打聞集』における不動明王についての記述を以下に引用する。

噉殘食表卑劣義、疏見。最初供表頓断。後供表漸断。殘食者表根本無明。非行者自力並等覺・十地所断。独仏菩提智断也。⁽⁵⁶⁾

右の文で重要なのは、根本無明が行者の自力並びに等覚・十地の所断ではないことが明確に示されている点である。日本天台では、元品無明即ち根本無明が等覚智断か妙覚智断かについて議論が起こり、中でも宝地房証真が等覚智断説を主張したことはよく知られている。⁽⁵⁷⁾ 右に挙げた『打聞集』の文章によって、覚鑿が根本無明を妙覚智断と考えていたことは明らかであり、覚鑿にとつての大日心王位が妙覚位であったことが判明するのである。⁽⁵⁸⁾ 以上のことから察するに、覚鑿には、『大疏』に説かれる中の第十一地仏果説に基づいて第十一地に仏果を置く場合と、『即身成仏義』等の「十地等覚不能見聞」の教説に基づき、十二地を立てて妙覚位に仏果を置く場合との両方があると言えるであろう。

四 小結

これまで覚鑿における除蓋障三昧と初地位の理解について考察してきた。その結果、以下の事実が判明したと言えよう。

- ① 覚鑿は、除蓋障三昧を得る行位を第八住心、即ち初法明道を得る行位かつ真言門の初地位と考えていた。
- ② 密教の行位に複数種あることを認識しながら、『大疏』の中の第十一地仏果説に基づいて第十一地に仏果を置く場合と、『即身成仏義』等の「十地等覚不能見聞」の教説に基づき、十二地を立てて妙覚位に仏果を置く場合とがある。
- ③ 「等覚位」という概念を多用して、前九種住心に対する第十住心の優位を宣揚している。
- ④ 自宗内の行位に関しても、「等覚難見十地何窺」の文を随所に援用して、妙覚位とその他の行位とを明確に弁別している。また、『心月輪秘釈』では、初地位を明らかに劣った行位として認識している。以上のこと

から察するに、「初地即極」といった考えを覺鑿が明確に打ち出していたとは考えられない。しかし、『愛染王講式』に「初地即極」の語句が見られることには一考を要する。

以上のことから、覺鑿が除蓋障三昧を得たと宣言したことは、即ち真言門の初地位の境界に入ったことを意味していたことが判明した。そして、それは第八住心にも通ずる境界でもあるはずなのであるが、覺鑿は「等覺位」という概念を用いて、前九種住心と第十住心とを峻別している。また自宗内の行位で言えば、真言門の初地位は究竟の妙覺位である大日心王位と明確に区別されるものであり、覺鑿が「初地即極」といった考えを持っていなかった、あるいは重視していなかったことが推測されるのである。

註

(1) 興全下・一一三九頁。

(2) 「此の五字」が具体的に何を指すかは、「三藏云」が誰であるかに依って変わってくる。というのも、この引用箇所直前において、覺鑿は「善無畏三藏伝」の図中に「*サマサマ*」を挙げ、「不空三藏伝」には「*サマサマ*」を挙げているためである。この五字真言に関して、那須政隆氏は「五輪九字秘釈の研究」(『那須政隆著作全集』四)において「三藏とは、たぶん不空三藏のことであろうが、三藏がいずれの著作にこれを述べているか、著者はまだ発見し得ない」とした上で、五字真言は「*サマサマ*」(あるいは「*サマサマ*」)(二〇三頁)であると説明している。しかし、文脈からすれば、もし「三藏云」が不空三藏であれば「*サマサマ*」よりも「*サマサマ*」の方が適当であるし、「*サマサマ*」に至っては、後に出てくる「金剛界に約した五字五藏観を説明する段」に見られるもの、「此の五字」の候補として挙げるには少々唐突の感も否めない。また、これに附随する問題として、同氏は「善無畏の伝の方はその源を尋ねると、善無畏訳の『三種悉地破地獄儀軌』に出ているようである」(九六頁)として、「善無畏三藏伝」の図の典拠を『三種悉地破地獄転業障出三界秘密陀羅尼法』(以下、『三種悉地』)に求めている。しかし、『三種悉地軌』所説の五字真言(大正一八九二一頁・上)は、上品が「阿鑿藍哈欠(*サマサマ*)

軌」(中品が「阿尾羅吽欠(*サマサマ*)」、下品が「阿羅波左那(*サマサマ*)」である。つまり「善無畏三藏伝」の図中に見られる「*サマサマ*」の五字は出てこないのであるが、同氏はこれについて何も言及していない。結局のところは「三藏云」の典拠が判明すれば、この五字真言についても明らかになると考えられるが、残念ながら、いまだ不明である。

(3) 「覺鑿名字釈」の末に附録された蓮敵筆「覺鑿号聖人説」には「相伝、覺鑿号聖人者、精修夙得三初地三昧。初地聖位故、門徒尊称为三聖人。後世混、称三上人者、蓋由不知三其義。」(興全下・一四二五頁)とある。この記述に依って、覺鑿の記した「初位」について、蓮敵は「初地位」と理解していたことが見て取れる。

(4) 大正一八・一頁下〜二頁上。

(5) 大正三九・五九〇頁上〜中。「義釈」卷一、統天全、密教一・三〇頁下〜三二頁下。

(6) 弘全一・九三頁。

(7) 安然是「菩提心義抄」卷四で除蓋障三昧を別教の初地位(円・密の初住位)に該当させている。これに関しては大久保良峻「台密の行位論」(『台密教学の研究』第七章)参照。

(8) 大正一八・九四五頁中。

(9) 興全下・一〇六七頁〜一〇六九頁。

(10) 興全上・二〇六頁〜二〇七頁。

- (11) 淨菩提心の一体速疾力三昧に關しては元山公壽「興教大師の淨菩提心説について」(『現代密教』四) 参照。
- (12) 興全上・五〇八頁〜五〇九頁。
- (13) 大正三九・七四一頁下。「義釈」卷一二、統天全、密教一・五三五頁下。
- (14) 大正一八・一四頁上。「爾時、觀自在菩薩、入於普觀三昧、說『自心及眷屬。』」とある。
- (15) 統天全、密教一・二七五頁上。なお、『大疏』卷十では「以三此普眼而觀衆生故、名觀自在者。入三此三昧已、從三其心出三種種光、光中現三是法門真言也。」(大正三九・六八一頁中)と説明している。
- (16) 弘全上・三六四頁〜三六五頁。
- (17) 弘全上・三五八頁〜三五九頁。
- (18) 興全上・五〇七頁。
- (19) 「菩提心論題釈」においても「不二仏乘十二地」(興全上・六六頁)と述べて、密教の行位を十二地で考えている様子が見られる。
- (20) 興全上・五八一頁。
- (21) 天台宗の教判では、六根清淨位を円教では十信位に、別教では地前の三賢位に充てる。
- (22) 弘全上・五〇六頁。大正七七・三八一頁中。
- (23) 『般若心経秘鍵』には「發心即到」(弘全上・五五四頁)の語も見られ、後代になって『第三重』「發心即到」の算題で論じられるようになった。なお、ここでいう發心の位が最初發心の位なのか、初地位なのか問題となるわけであり、これについて、高井観海氏は「發心即到」(『真言教理の研究』所収)において「初地發心に心得て立論するが如きが妥当のように見える」(二五三頁)と論じている。しかし、その根拠が不明瞭であり、筆者自身も未だ確定できていないため、小稿においては『般若心経秘鍵』はしばらく措くことにする。
- (24) 『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』には「若有衆生遇此教、昼夜四時精進修、現世証得歡喜地、後十六生成正覺。」(大正一八・三三一頁中。弘全上・五〇六頁)とあり、『成就妙法蓮華経王瑜伽觀智儀軌』には「若能專注無間修習、現生則入初地、頓集一大阿僧祇劫福智資糧。」(大正一九・六〇二頁上。弘全上・五一四頁)と記述されていて、どちらも現世(現生)に初地を証得することが基準になっている。
- (25) 興全下・一四五四頁。
- (26) 興全上・五四一頁。
- (27) 大正九・四四九頁下。
- (28) 弘全上・三七〇頁。
- (29) 弘全上・四八一頁。
- (30) 大正四五・五〇五頁下。
- (31) 興全上・五三五頁。

- (32) 興全上・三〇二頁～三〇三頁。
 (33) 大正一八・一頁中。
 (34) 真全一九・一五七頁上～一六二頁下。
 (35) 大正七九・六四五頁下～六四六頁下。
 (36) 大正七九・六四五頁下。
 (37) 弘全四・一五二頁。
 (38) 大正七九・六七〇頁下～六七二頁中。
 (39) 濟暹と重誓の行位論に關しては大久保良峻「台東両密における行位論の交渉」(『台密教学の研究』第八章)や田戸大智「濟暹における密教行位説」(『東洋の思想と宗教』一二)参照。
 (40) 大正三九・六一一頁中。『義釈』卷三、統天全、密教一・八五頁下。なお、大久保良峻「台密の行位論」(『台密教学の研究』第七章)及び「台東両密における行位論の交渉」(『台密教学の研究』第八章)では、東台両密における仏果の位置について詳論している。
 (41) 大正三九・七三八頁上～中。『義釈』卷二、統天全、密教一・五二六頁下。
 (42) 興全上・五一六頁～五一七頁。
 (43) 保延五年『打開集』にも「一道・極無是等覺撰。権仏界故。権者、菩薩云也。故同菩薩撰」(興全上・五一四頁)とあり、第八・第九住心を等覺位に配する様子が見られる。
 (44) 弘全一・四七四頁。
 (45) 弘全一・五一三頁。大正七七・三八三頁上。
 (46) 弘全一・五〇七頁。大正七七・三八一頁下。
 (47) 興全上・五七五頁。
 (48) 興全上・五七五頁。
 (49) 興全下・一〇三九頁。
 (50) この文について、苦米地誠一氏は「覚鑊の往生觀」(『平安期真言密教の研究』二・第一編第四章)において、淺觀少行の果が「心月輪秘釈」では「現生登初地」であるのに対して、「二期大要秘密集」や「八葉觀」では「極樂上品上生」へと変化していることを指摘している。
 (51) 興全下・一二四九頁。
 (52) 興全上・七〇三頁。
 (53) 弘全四・一六頁～一七頁など。大正七七・三八七頁中など。
 (54) 康治元年『打開集』には「十地名・加持即身成仏、不_レ名_二顯得_一。雖_レ有_二三分顯得_一、非_二圓滿_一故」(興全上・五七八頁)という記述も見られ、十地位は分の顯得は有るが、圓滿しないために顯得即身成仏ではなく、加持即身成仏であると明言している。しかし、十地を加持即身成仏に充たせるとなると、等覺の位置が曖昧になってしまう。もしくは、この場合には、覚鑊が第十一地仏果説で考えている可能性もあるだろう。また苦米地誠一氏は「覚鑊の成仏論」(『平安期真言密教の研究』二・第一編第三章)において「この顯得とは妙覺成仏であり、正等覺を得ることであって、分

の顕得とは、十地の菩薩位において一分の覚を得ることを認めるというもので、(中略) 加持即身成仏を菩薩位(十地位)としているのである。本来の三種即身成仏説には加持即身成仏において一分の覚を得るという考え方はなく、またそれを菩薩の階位に当て嵌めることもないが、(中略) 三種即身成仏説の理解に、天台教学の影響を受けたものといえよう」(九三頁)と述べて、天台教学からの影響にも言及している。さらに同氏は前掲「覚鑿の往生観」において「覚鑿は現生成仏を信じて三密行を修行し、初位の三昧(除蓋障三昧)の自覚を得たが、現生における顕得成仏は実現でさず……」(二三五頁)と述べている。

(55) 興全上・五七八頁。

(56) 興全上・五二二頁。

(57) この問題に関しては大久保良峻『新・八宗綱要』七五頁や、同著『天台教学と本覚思想』三六頁及び二〇二頁で触れられている。

(58) なお、覚鑿の妄執論については拙稿「覚鑿の教学に見る妄執論」(『印度学仏教学研究』五八一―)参照。

〈キーワード〉覚鑿 空海 除蓋障三昧 初地 妙覚 等覚
打聞集